





## 子育て支援フォーラム 2024 報告 2025 年 2 月 8 日実施

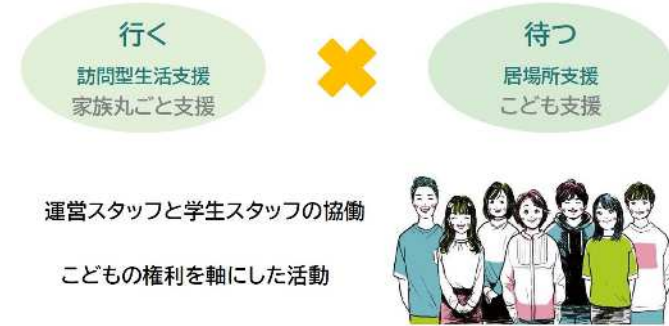
### 親子に寄り添う伴走支援・居場所支援

### NPO 法人こどもサポートステーション・たねとしずくの取り組み

● NPO 法人こどもサポートステーション・たねとしずく代表理事の大和陽子さん(写真)を西宮市からお招きし、オンラインを含む 26 人が参加しました。大和陽子さんは板橋の生活クラブ組合員として活動されていましたが、東日本大震災を契機に西宮市に転居、2015 年にリトルという団体を設立し、産前産後の家事支援を始めました。3 年間ほど支援に没頭する中で想像していた以上に、シングルの方の大変さ課題の複雑さが身に染みることになり、本当に明日も食べられないかもしれないという家庭のお手伝いがしたいという思いで困窮家庭への支援に特化し、現在の NPO 法人こどもサポートステーション・たねとしずくを設立しました。

#### ● 訪問&居場所のハイブリットによる支援が特徴

たねとしずくは①居場所の運営②訪問支援③支援者支援の 3 事業により、子どもたちを孤立させない伴走支援を行っています。虐待予防やヤングケアラー予防、自死予防を目的として掲げ、子どもたちが SOS を出せない孤立状態に陥ることがなく、自分の人生を選んで安心してこどもらしい生活ができる社会を作りたいという思いで活動されています。



#### ● フードパントリーは出会い、つながるチャンス

月に 1 回、35~40 家庭に食品を配布するフードパントリーの活動は、単に経済支援としてではなくフードバンクからの食品を段ボールごとに置き、一つずつ取ってもらうことで滞在時間を長くしてスタッフとおしゃべりするきっかけをつくり、信頼関係をつくる場になっています。交流スペースではこどもは学生スタッフと一緒に遊び、大人同士の交流の場は臨床心理士にファシリテーションしてもらい、気になる人のことは後で状況を報告してもらうようになっています。

#### ● 訪問支援は親戚のおばちゃんのような立場で

年間 20 家庭、のべ 120 回、ひとり親家庭を訪問し、家事や子育ての支援を行っています。最大の特徴は 2 人で行くこと。行政サービスではないので、自由に支援の形を作れます。1 人は親との関係構築、もう 1 人はこどもとの関係を構築します。親御さんとは一緒にご飯を作ったりしながら子育て

の悩みを聞いたりする時間になっています。こどもは宿題したり遊んだり、2 時間こどもとしっかり遊んで甘えてもらうような時間になっています。虐待リスクがある家庭の場合も、行政のように指導的な立場でお母さんしっかりしなさい、こどもをちゃんと見てあげなさい、と指導する必要はなく、お母さんの味方になり、こどもとの橋渡しになってあげられる、親戚のおばちゃんのような関係で関わられるのが強みになっています。そのほかにも乳幼児から小学生のご家庭をボランティアとペアで訪問し手遊びや絵本を読む(年 30 回)「絵本訪問」や、家事・子育て支援の訪問後に親との関係維持のために数か月に 1 度訪問する「テータイム訪問」も行っています。

#### ● 「教育」×「福祉」の融合 たねとしずくライブラリー

水・木・金の 10 時~15 時、学校に行っていない小学生・中学生が好きに過ごす「くるくるスペース」、15 時~20 時は中高生が放課後に立ち寄り「放課後スペース」となり、自習室は学生スタッフを必ず配置して誰でも質問できるようにしており、毎回スタッフが夕食を作って出しています。

#### ● 日常的に本に触れるしかけを作る

西宮市はブックスタートの制度がなく、ひとり親支援で訪問に行った家庭に本がなかったことをきっかけに、本のある場所にしようと考えました。一箱本棚サポーター制度は 3,000 円以上の寄付でその方の本箱にしてもらい、中に本を置いてもらっています。現在 50 箱が寄付で埋まっており、寄付者は本の入れ替えて間接的に子どもたちに関わっています。寄付者が本を置かずユースボックスとして子どもたちが好きな本を置くパターンもあり、それは自己表現の場にもなっています。クリスマスの恒例イベントで本に触れるミッション(旅に持っていきたい本は?など)を書いておきそれをクリアしたら駄菓子がもらえたり、いくつかのお題を用意して子どもたちに本を紹介してもらおうブックトークなどの取り組みで、本を通して子どもたちの表現を引き出しています。



たねとしずくライブラリー 1 階の様子

## 福祉ツアー 認知症になっても大丈夫! 報告 2024 年 11 月 23 日実施



認知症介護研究・研修東京センター研究部長永田久美子さん(写真)に認知症基本法の内容と意義をテーマに学習会を行い、その後、社会福祉法人・悠遊の理事長、山田健介さんより悠遊の実践についてお話を伺い、グループホームいずみを見学しました。

#### ● 当事者の声が社会の認知症観を変えた

今まで認知症になると物事わからなくなり、社会参加や自己決定も無理と言われていましたが、この 10 年間で当事者からそんなことはない声が上がり始め、2018 年には「認知症とともに生きる希望宣言」がなされ、認知症は他人事、恥ずかしいこと、何もできなくなる、地域で暮らすのは無理、といった古い認知症観からの転換が求められました。そして、「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」(2024 年 1 月施行)では、本人が希望と尊厳をもって暮らすことのできる共生社会の実現を目指すとし、すべての認知症の人が基本的人権を享有する個人と明記されました。

#### ● 認知症になっても大丈夫と思えるまちを

古い認知症観に縛られ、本人のできないところばかり見て地域に出るのは無理だと地域から医療や介護の専門職が遠ざけてしまい、閉鎖的な中で本人と職員だけで頑張ろうとするため、どちらもストレスになり、本人はなおさら不安と混乱とストレスが溜まって怒り出したり、落ち込んだりしてますます状況が悪くなってしまいます。このような状況を変えていくためには、まだまだ自分らしい暮らしをしている元気な時から新しい認知症感を持ち始め、認知症になっても隠す時代じゃない、お互い様だね

と言ひ合える地域になっている必要があります。発症後も、どんどん地域に出て行きたいところに行く、危なかったら家族だけで見守るのではなく、むしろそれまでの仲間や、小中学生や高校生などまちの若者たち、商店街の人などが参画して、家族だけに頑張らせない地域をどう作るかが大事で、認知症があってもなくても、共に生きていける共生社会を作ることにつながるというお話が印象的でした。

#### ● 社会福祉法人悠遊の取組み

社会福祉法人悠遊は生活クラブ生協が母体となり 1993 年に設立され、基本理念として尊厳・自立支援、地域、サービスの質の確保を掲げ、居者の自己決定や、地域との繋がりを大切にしています。また、10 の基本ケアに基づく理念の共有や介護技術の底上げにも取り組んでいます。



←グループホームいずみの見学の様子

日々の様子を公式インスタグラムでも公開していますのでぜひのぞいてみてください!



## 安心ネットワーク構想連絡会報告 2024 年 2 月 4 日実施



24 時間 365 日の暮らしを支える「市民のための市民による安心ネットワーク構想」の実現を目指すために、市民版地域福祉計画の策定や実現に向けた活動事例を毎年共有しています。今年度は 29 地域が参加し、板橋と世田谷の活動を共有しました。

#### ● 板橋地域協議会

報告者:今澤てる子さん、山村真理さん

・2020 年、地域協議会ニュースで組合員の声を集めるためのアンケートから始まり、21 年に市民版地域福祉計画の学習会や板橋センターでのまちカフェを開催しました。22 年は板橋にある保育園や地域包括支援センターなど地域資源の地図落としを行い、コーヒー券を渡して、お茶を飲みながら板橋のまちづくりについて話をする「デポカフェ」を開催して意見や提案を集めました。  
・そうした活動の中で、地域の課題として学校に行きづらい子どもたちが行ける場所や小学生が放課後遊べる場所が不足していることがわかり、23 年 9 月には映画「ゆめパのじかん」を上映、その後も活動が継続され、子どもの居場所「ばかばかプレイス」の活動が始まっています。

#### ● 世田谷地域協議会

報告者:小島孝子さん、岡本京子さん

・世田谷の計画は更新を重ねて第 4 期となります。テーマを①防災まちづくり②仲間づくり新しい人材の確保と事業連携③居場所づくりとし、プロジェクトチームを作り活動をすすめています。  
・今年 1 月には運動グループの人材確保のために Let's enjoy job(旧称 働き方説明会)「地域で楽しく起業する~共感してつながる」を開催し、21 人が参加しました。  
・現在、2025 年度~27 年度の第 5 期 3 か年計画を策定中で、『暮らし続けたい世田谷』のまちづくりをめざし、「仲間づくり・人のつながり」を強化することを大きなテーマとしています。